

「2025 年度東アジアジュニアワークショップ参加報告書」

京都大学文学研究科 修士課程2年 佐藤彬子

<学習成果>

歴史学を専攻する私にとって社会学における研究手順、研究成果のまとめ方や論の組み立て方を学ぶことができたのは、非常に有意義な経験であった。歴史学では常に「史料から何が言えるのか」を原則として意識する。現存する史料は、過去に起きた出来事のすべてを説明してくれるわけではない。そのため、歴史研究においては、史料によって何が証明でき、何が証明できないのかを明確に区別することが極めて重要である。実際、何が証明できるかは史料を精査して初めて明らかになるため、研究の過程ではリサーチ・クエスチョンを繰り返し練り直す必要がある。これに対し、今回のワークショップで私が経験した研究の手順は、歴史学とは大きく異なっていた。このことは、研究成果を発表用スライドにまとめる際に強く感じた。発表の際には、理論や概念（たとえばインターセクショナリティやマスキュリティ）を自身の分析の枠組みとして設定し、理論・概念に関する先行研究の議論・限界・不足点を提示、そこからリサーチ・クエスチョンへと繋げていった。また、リサーチ・クエスチョンとそのあとに続く研究手法、さらには分析事例との間に、理論的整合性を厳密に保つことが不可欠であった。こうした理論主導の研究構成は、史料の制約の中で問いを練り直していく歴史学のアプローチとはかなり異なるように感じた。学問が対象とする領域が異なれば、研究手順が異なるのは当然である。しかし、その違いを実際に体験したことで、私は自分が日々行っている「歴史学研究」という営みを、より客観的に見つめ直すことができた。社会学が理論を通じて現代社会を分析しようとするのに対し、歴史学は個々の史料を手がかりに、理論では捉えきれない過去の実相を探ろうとしているように思われた。この差異を体験的に理解できたことが、今回の最大の収穫であったと考える。

<渡航先での経験>

参加学生はどの学生も皆非常に意欲的で、質疑応答・議論に積極的に参加する雰囲気が刺激的であった。私もできるだけ積極的であろう、と思い数多く質問することができた。また、台湾の歴史・文化をプロフェッショナルな人々に解説してもらいながら見学、経験できたのは非常に良かった。多くの場合、観光地を訪れる際は「見る」だけで終わり、アウトサイダーという立場を抜けられないでいる。しかし、今回は立法院・国立台湾博物館・龍山寺のいずれにもガイドの方・台湾大学学生による解説があり、「見る」だけでなくより深く学ぶことができたと考える。また、台湾大学の学生と交流しながら共に台北市の中を歩けたことで、アウトサイダーという立場を少しだけ抜け出せたのではないかと考える。今回感じた台湾への興味・関心を一時のものにせず、今後も台湾について学び続けたいと思う。

<プログラム内容>

一学期という時間をかけて、途中経過を先生方と共有しながら発表準備を進められたことは、非常に有意義であった。普段のゼミでの発表は、ある程度完成させた段階で先生に共有し、助言をいただくと

いう形式をとっている。また、私の専修では一学期に一度の発表であり、比較的長期的な作業となる。これに対し、今回のプログラムは約三か月という短期間で進行し、その間に四回の発表練習が設けられ、毎回先生方やTAから具体的な助言を受けることができた点が非常に有益であった。発表内容や結論の導き方について継続的に指導を受け、改善を重ねながら完成度を高めていくという形式は、私にとって初めての経験であり、過程そのものを楽しむことができた。加えて、私の専修のゼミでは、発表時にパワーポイントを用いずレジュメのみで行うのが一般的であり、発表時間にも制限がないため、内容を取捨選択する必要がほとんどない。これに対し、今回の発表は十五分という限られた時間内で行う必要があり、短時間で要点を分かりやすく伝える工夫が求められた。そのため、聴衆を意識した資料作成と発表構成を丁寧に検討するという貴重な経験を得ることができた。

<進路への影響>

修士課程修了後は就職を考えており、その点はプログラム参加後も変化はない。しかし、自身の修士論文執筆には非常に有益な経験になったと考える。学習成果において述べたように、今回の経験は「歴史学とは何をする学問か」を再度私に考えさせるものであった。先生方からの助言を受けながら発表内容を練り上げていく過程で、社会学と歴史学の研究手順の違いをより敏感に意識するようになった。その経験を踏まえ、自身の研究に立ち戻った際には、個々の作業が研究全体の中でどのような位置づけを持ち、どのような目的を果たしているのかを意識的に考えるようになった。今回の経験を活かしてより良い修士論文となるようさらに努力を重ねていきたい。